

プレス資料

「パリ地方とノルマンディー
印象派を巡る旅 小川康博、2018年夏」展

印象派を巡る旅

幸せなひとときを探しに

展覧会及び写真家について	1
#幸せなひととき サン・ラザール駅、パリ地方	2
#幸せなひととき モンマルトル、パリ地方	3
#幸せなひととき シャトゥー、パリ地方	4
#幸せなひととき モレ・シュル・ロワン、パリ地方	5
#幸せなひととき オーヴェル・シュル・オワーズ、パリ地方	6
#幸せなひととき イエール・カイユボット邸、パリ地方	7
#幸せなひととき トゥルーヴィル、ノルマンディー地方	8
#幸せなひととき ルーアン、ノルマンディー地方	9
#幸せなひととき ジヴェルニー、ノルマンディー地方	10
#幸せなひととき エトルタ、ノルマンディー地方	11
#幸せなひととき コタンタン半島、ノルマンディー地方	12
#幸せなひととき ル・アーヴル、ノルマンディー地方	13
ノルマンディー・パリ イル＝ド＝フランス印象派のデスティネーション契約: フランスにとっての世界的な観光ブランド	14
パリ・イルドフランス地方観光局 ノルマンディー地方観光局	16
パートナー	17

パリ地方とノルマンディー 小川康博 印象派を巡る旅 2018年夏

芸術史に革命を起こした印象派。芸術の歴史を揺るがしながら新たな絵画の潮流として興隆した印象派は19世紀後半、パリ、そしてイルドフランス地方、ノルマンディー地方にて誕生しました。現在知られる印象派絵画の多くはパリの近代化された活気ある境界、セーヌ河流域、ノルマンディーの沿岸で生まれたのです。

今日この地域では、美術館でこれらの傑作を堪能するだけでなく、作品となったその風景のほとんどが今なお残るため、モネ、ルノワール、ドガ、マネ、モリゾ、ピサロ、ブーダン、カイユボット、シスレー、ゴッホなど、印象派の巨匠とその後継者たちの足跡をたどるという貴重な体験ができます。

小川康博氏は今夏、現代の写真家としての視点から当時の印象派画家と芸術的な対話をするため、これらの絵画作品の舞台となった地を訪れました。

印象派の代表作が誕生したパリ地方およびノルマンディー地方の12か所を巡り、小川氏は、モネ、ルノワール、ゴッホなどがイーゼルを構えた同じ場所に立ち、カメラを構えました。そして今回、一世紀という時を経て、彼らがキャンバス上に表現した「幸せなひととき」について、彼の現代的な解釈などが写真を通して伝えられています。

この旅で撮影された写真は、まさに印象派が描いた光や風景美、生きる喜びに満ちており、パリ地方とノルマンディー地方に印象派の息吹が根強く現存することを物語っています。

当展は、これらの地を彩るパレットのようなものです。ご覧になる方それぞれに想いを馳せてお楽しみいただけるでしょう。キャンバスから感覚的なものへ、さらには夢から現実へと、皆様を「印象派を巡る旅」へとといざないます。



© 2018 Studio Puyfontaine

小川康博(おがわ・やすひろ)

1968年神奈川県生まれ。フリーランスの写真家。二十代の時に独学で写真を始める。2000年に太陽賞、2009年に日本写真協会賞新人賞を受賞。写真集に、中国・三峡ダムの建設で長江に水没する風景を追った『Slowly Down the River』(クレオ刊)、厳しい過疎に直面する日本の離島の風景を収めた『島語り』、亡き母への追憶を写真で表現した『Cascade』(共に蒼穹舎刊)がある。フィルムカメラとデジタルカメラを使い分けながら海外や国内で撮影を続けている。東京在住。ホームページ www.ogawayasuhiro.com

印象派を巡る旅
幸せなひとときを探しに

2018年は日仏交流160周年という節目の年にあたります。これを機に、パリ・イルドフランス地方観光局およびノルマンディー地方観光局は、ふたつの地方を「印象派」というテーマからひとつの観光destinationとしてPRすることを目的とした「観光destination契約」の枠組みの中で、文化的な展覧会を企画し、日仏両国の交流を齎ることにいたしました。印象派の名画12点が生まれた場所を旅し、現代的な視点から写真で表現するというこの展覧会のミッションは写真家の小川康博氏に託され、氏は2018年夏、パリ・イルドフランス及びノルマンディー両地方にて撮影を行いました。

当展覧会は2018年9月20～23日に東京ビッグサイトで開催するツーリズムEXPOジャパンのフランスブースにて展示されます。9月20日、21日は業界関係者の商談会、22日、23日は一般開放日となります。

当展はその後、フランス観光開発機構の協力により、日本国内の他の展示会場を巡回予定です。



#幸せなひととき サン・ラザール駅、パリ地方

1837年建設のサン・ラザール駅は、印象派運動の歴史において重要な位置を占めています。近代化の象徴そのものとして、多くの画家に着想を与え、マネ、カイユボット、ピサロが絵を描き、中でもモネは、1877年、金属とガラス製の駅舎にイーゼルを構え、一連の作品を生み出します。この駅は、画家たちにとって、逃避のシンボルでした。というのは、とりわけ、パリとノルマンディーを結ぶ列車の発着点だったからです。

今も現役で稼働を続けるサン・ラザール駅は、1日の利用客が45万人を超えるヨーロッパ第2の駅となっています。パリとノルマンディー地方とをつなぐ駅で、ジヴェルニー、ルーアン、ル・アーヴル発着の電車が走ります。印象派を訪ねる旅のまさに出発点なのです。

この絵はパリのオルセー美術館に展示されています。

鉄道の駅が大好きです。特にヨーロッパの駅は歴史的な建築物が多く、まるで教会の中にいるような荘厳な気分させられることもしばしばです。サン・ラザール駅特有の三角屋根は、モネの時代と変わらぬ様相で私たちを温かく迎えてくれます。



#幸せなひととき モンマルトル、 パリ地方

パリがナポレオン3世による大改造計画のさなかにあるとき、芸術家たちは家賃の安いモンマルトルへと集まるようになりました。ルノワールも1876年に居を構え、モンマルトルの芸術的な熱狂の雰囲気へと溶けこんでいきます。通りは、当時急増した酒場やカフェ・コンセール(ショーを見せる飲食店)、ダンスホールの音が響き渡り、中でも有名なムーラン・ド・ラ・ギャレットの舞踏会でルノワールはよく午後を過ごしていました。この傑作で、ルノワールは、その庶民的なダンスホールの楽しげな様子を再現しています。今日でもなお、モンマルトルでは、活気のある小路、たくさんのバーやレストラン、カフェテラスによって、祝祭のような雰囲気を味わうことができます。

この絵はパリのオルセー美術館に展示されています。

モンマルトルはいつ訪れても華やいだ空気に満ちています。特に週末、この場所には何千人もの人々が訪れ、カフェのテラスや路上で楽しげなひとときを過ごしています。もし運が良ければ、この写真のように、路上で繰り広げられる粋なウェディングパーティーに遭遇することができるかもしれません。モンマルトルにはこの場所でしか味わうことのできない特別な空気がいつも電流のように流れています。





#幸せなひととき シャトゥー、 パリ地方

パリとサン・ジェルマン＝アン＝レーとの列車が1837年に開通すると、パリの人たちはセーヌ川河畔に30分以内で行けるようになり、泳いだり舟遊びをしたりして楽しみました。ダンスホールやレストランがブジヴァルやシャトゥーに数多く建ち並び、そのお祭りのような賑やかさを、モネ、ドガ、シスレー、カイユボット、とりわけルノワールが描いています。ルノワールはシャトゥーを「パリ郊外で一番美しい場所」と呼び、約30点の作品を生みました。中でも有名な「舟遊びをする人たちの昼食」は当時大変人気を博していたレストランのメゾン・フルネーズを舞台にしています。

レストラン・フルネーズとそのセーヌ川沿いの美しいテラスは、現在でも印象派の島に位置し、当時の趣をたたえています。ひと休みしながら同時に思いを馳せるのにぴったりな場所です。隣接する美術館が、印象派の画家たちを魅了したその時代の陽気な雰囲気を再現しています。

この絵は、ワシントンのPhilips Collectionに収蔵されています。

4



パリの中心から車で半時間ほどの距離であるにも関わらず、セーヌ川沿いのレストラン・フルネーズは驚くほど閑静でリラックスした環境にあります。和やかな雰囲気の中で人々は昼食やワインを楽しみ、ワインの酔いがほどよく回り始める頃になると歌やダンスに興じ始めるのでした。彼らの笑い声を耳にしながら、私も半ばほろ酔い気分でカメラのシャッターを押し続けました。

オーギュスト・ルノワール、「舟遊びをする人たちの昼食」、1880-81年
Philips Collection, ワシントン

© Bridgeman Images

© Paris Region Tourist Board/Yasuhiko Ogawa

#幸せなひととき モレ・シュル・ロワン、 パリ地方

シスレーは、1882年モレ・シュル・ロワンの素敵な中世の町並みに移り住みます。20年間、いわゆる一文無しになるまで、画家はそこで数多くの絵を描き、そのうちの1つが「モレの橋」です。背景には、シスレーが四季を通じて描いたノートルダム・ド・グラス教会が見えます。

今日、モレ・シュル・ロワンは、生前は無名だったシスレーにオマージュを捧げています。画家の足跡を辿るように町の小路を歩きながら、実際に絵が描かれた場所では複製を見ることができます。パリから1時間で行けるので、自転車やカヌーで、往時の魅力が残っているこの小さな町を周ってみるのもお勧めです。

この絵はパリのオルセー美術館に展示されています。

シスレーの描いたモレ・シュル・ロワンの絵画を初めて見たとき、教会の鐘の音が美しく鳴り響く日曜の朝を思い浮かべました。私が訪れたのはシスレーの絵画と同じように美しく晴れ渡った日の朝で、私が想像したように、教会の鐘がまるでこの土地を祝福するかのよう美しく鳴り響いていたのでした。

アルフレッド・シスレー、「モレの橋」、1893年、
オルセー美術館、パリ

© RMN-Grand Palais (Musée d'Orsay)/Hervé Lewandowski

© Paris Region Tourist Board/Yasuhiro Ogawa



#幸せなひととき オーヴェル・シュル・オワーズ、 パリ地方

オーヴェル・シュル・オワーズは、コロー、ドビニー、そしてピサロやセザンヌという世代を超えた画家たちを受け入れた、本物の芸術家村でした。ゴッホはそこに、療養生活を送っていた南仏から戻った直後の1890年に滞在しました。そして、村を「深刻なまでに美しい」といってたちまち虜になり、70日間で80以上もの作品を制作するという多作ぶりを示します。「カラスのいる麦畑」は、彼の最後の傑作です。ゴッホは、描き終えてから数日後に亡くなり、その死は今日もお謎に包まれています。

オーヴェル・シュル・オワーズを訪ねると、まるで巡礼者の気分になります。ゴッホの足跡一村の通りの複製画、絶命したラヴーの宿屋の部屋、弟のテオと埋葬されている墓地、そしてその周りを囲む絵の題材になった麦畑まで一を辿っていけば、感動を覚えずにはられません。

この絵はアムステルダムのファン・ゴッホ美術館に収蔵されています。

ゴッホが晩年の日々を過ごしたオーヴェル・シュル・オワーズの麦畑を歩き回りながら、私は絵になる何かを探し求めていました。すると、午後七時くらいでしょうか、今まで見たことのないような神々しい光があたりを照らし始めました。私は夢中になり、自分でも何を撮っているのかわからないままシャッターを押し続けました。

フィンセント・ファン・ゴッホ、「カラスのいる麦畑」、1890年7月、
ファン・ゴッホ美術館、アムステルダム

© Bridgeman Images

© Paris Region Tourist Board/Yasuhiro Ogawa

#幸せなひととき イエール・カイユボット邸、 パリ地方

1860年から1879年まで、この美しい邸宅とそれを取り囲む見事な庭園はカイユボット家の休暇中の邸宅でした。ギュスターヴ・カイユボットはそこで、館、庭園、菜園、そして画家とその兄弟の共通の趣味である舟遊びに興じた小川、それから友人や家族との触れ合いを、80以上の絵画に残しました。

ささやかな幸福感は、完全に保存され一般公開されているカイユボット邸に行けば、公園でのピクニック、木陰での昼寝、小川での舟遊びなどで、今日でもなお味わうことができます。当時の家具が現存する画家の寝室など、屋敷は見事に保存されていて、当時の様子を知る貴重な機会を与えてくれます。

この絵は個人蔵です。

芝生の上で寝転んだり、子供たちが駆けずり回ったり。画家ギュスターヴ・カイユボットが暮らした家と広大な庭は今では一般市民の憩いの場となっています。白い瀟洒な邸宅と美しい芝生が広がる公園はカイユボットが描いた130年前と同じ佇まいを見せていて、それは単純に素晴らしいことだと思います。楽しい子供たちの歓声が今でも耳に残っています。

ギュスターヴ・カイユボット、「イエールの邸宅の庭園」、1875年、
個人蔵

© Brame & Lorenceau, Paris

© Paris Region Tourist Board/Yasuhiro Ogawa



#幸せなひととき トゥルーヴィル、 ノルマンディー地方

ドーヴィルとトゥルーヴィルはノルマンディーの海岸に面したよく似た趣の、19世紀後半に人気を博した街です。細やかな砂が延々と続く海岸、1863年のパリ・ドーヴィル間の列車の開通、カジノや海辺のレジャーの発展によって華やかな社交界がそこに生まれました。モネのメンターであったブーダンが、「浜辺の情景」を最初に絵にした画家で、そのなかで膨らんだスカート姿の美しい女性を描いています。

この絵では、詩情あふれる情景の中、人々が背景の海に溶け込んでいます。「空の王者」と言う別名を持つウジェーヌ・ブーダンは、この絵の中にノルマンディーの光の繊細さを見事に表しました。今日、トゥルーヴィルの浜辺の板張りのプロムナードを散歩すれば、ウジェーヌ・ブーダンがその美しさを描いた光のバリエーションや雲の動きを眺めることができます。この散歩道の魅力にあふれた雰囲気は、当時の上流社会がこぞって求めた瀟洒な邸宅とともに今でもそのままです。ドーヴィルもまた、印象派の画家が当時描いた海水浴場の贅沢な雰囲気をたたえています。カジノ、競馬場、立派な木組みの邸宅がパラソルの並ぶ続く海岸沿いに並んでいます。

この絵はル・アーヴルのアンドレ・マルロー近代美術館で観覧できます。

私が訪れたとき、トゥルーヴィルの浜辺は濃い霧に覆われていました。歩き回るには不向きな天候でしたが、「空の王者」と謳われたブーダンの絵画世界を回想するにはとっておきの一日だと思いました。真っ白なノルマンディーの空の下、ル・アーヴルの美術館で見たブーダンの絵画を思い浮かべながら、私は霧の向こうに広がる海と空の光景をぼんやりと見続けていました。

#幸せなひととき ルーアン、 ノルマンディー地方

セーヌ川の蛇行点に位置したルーアンの街は、印象派の画家たちを魅了してきました。この街を「ヴェニスのように美しい」とピサロは賞賛しています。ピサロが、ルーアンにかかる橋やセーヌ川沿いの近代的な生活を描く一方、モネは、2年間にわたって繊細なゴシック建築の真の傑作である大聖堂を描きました。

モネは、大聖堂が表情を変える様子に取りつかれて、同時に14枚の絵を制作するなど、光の限らないパリエーションを捉えようとしてきました。その壮大な制作活動から、有名な大聖堂の連作が生まれ、ファサードを描いた28枚の絵は世界的に有名になります。この絵で、モネは大聖堂にかかった霧のベールを水の粒が溢れている様に見事に描きました。

今日でもなお、大聖堂広場に立てば、モネが感じた感動を味わうことができます。そして街の歴史に満ちた小道を歩いたり、セーヌ川沿いでランチを取ったり、シスレーやピサロの足跡をたどれば、印象派の世界を満喫することができます。

この絵はルーアン美術館に展示されています。

かつてモネのアトリエがあった場所で、私はルーアンのカテドラルを午後の時間ずっと眺め続けていました。カテドラルのファサードは日が西に傾くにつれてゆっくりとその表情を変えてゆき、それをずっと見続けていると、私はまるで時間の感覚を失ったかのような錯覚に囚われました。私は思いました。モネが描きたかったのはカテドラルそのものではなく、きっとこんな、時間を超越した感覚であるに違いない、と。





#幸せなひととき ジヴェルニー、ノルマンディー地方

1883年、モネはセーヌ川からほど近いジヴェルニーに居を構えます。自宅の庭を1枚の絵のように整備し、その10年後、睡蓮のある池を作るという大きな計画に着手します。そして日本庭園に着想を得て特にしだれ柳、竹、ボタンをあしらった庭園をつくります。おそらく浮世絵にならって作られたと思われる木製の橋がその明るい庭園に東洋風の雰囲気を与えています。

25年以上にわたってモネは、その庭に題材を求め続け、水面の変化する反映をとらえて描こうとしました。1980年から、クロード・モネの自宅と庭園は毎年3月から10月まで一般公開されています。睡蓮のある池にかかる太鼓橋を歩いたり、モネの寝室のドアを開けてみれば、画家の内面に潜り込んだような感覚が味わえます。

モネの家にほど近いジヴェルニー印象派美術館では、年に2回印象派をテーマにした特別展を開催しています。そして「クロード・モネの周りで」と題した常設展も行なっています。

この絵はパリのオルセー美術館に展示されています。

ジヴェルニーのモネの庭園に足を踏み入れたとき感じたのは、ここは単なるフラワーガーデンでも池でもなく、モネのヴィジョンそのものであるということでした。オランジュリー美術館で睡蓮の絵に接して以来私はモネのファンなので、彼のヴィジョンが作り出した風景に囲まれて私は幸せな気分でした。この写真を撮ったとき、私はおそらく半ば夢見心地の心境だったのでしょう。この写真にはそんな私の気持ちが写しこまれています。

#幸せなひととき エトルタ、 ノルマンディー地方

モネは、1883年から1886年の間エトルタに足しげく通いましたが、それは、この小さな港の見る者を圧倒させる断崖に魅了されたからでした。そして80回以上にわたり、あらゆる角度からその壮大な景観を絵にしました。

その断崖が過去に偉大な画家により何度も描かれていたということは、モネにとっての1つのチャレンジになります。そのためモネは、新たなアプローチを探し、エトルタの3つの断崖のうち最も高く、かつ遠くアクセスが難しいマンヌポルトを何度も描きます。ローアングルの視点による絵には、海から断崖がそびえたつかのように見え、また、海面には太陽がきらきらと映りこんでいます。

今日でも、断崖の上に立って日没を眺めるのは、まさに貴重な感動の瞬間です。そのパノラマにたどり着くには、海を見下ろす小道を登っていくのですが、その最中も世界でそこにしかない景観を見ることができます。印象派の見た風景は、天気が良ければ、海から船上で、または海岸を賑わす店のテラス席で休憩をしながらでも、楽しむことができます。

この絵はノルマンディーのカーン美術館に展示されています。

モネの描いた崖を見下ろす高台に私は日没までの数時間を過ごしました。それはゴージャスな体験でした。崖の色は白から黄色、オレンジ色と移り変わり、そして日没の直前、薄いピンク色に染まりました。海、崖、そして太陽。目の前の風景はモネが描いた当時と何ら変わることはありません。モネもきっと、崖の色の移り変わりを絵筆片手にじっと眺め続けていたことでしょう。

クロード・モネ、「エトルタ、マンヌポルト、水の反映」、1885年頃、
カーン美術館

© RMN-Grand Palais (Musée d'Orsay)/Martine Beck-Coppola

© Paris Region Tourist Board/Yasuhiro Ogawa





#幸せなひととき コタンタン半島、 ノルマンディー地方

「晩鐘」及び「落穂拾い」の作者であるミレーは、未開発でひっそりとしたノルマンディーの中央で海に面したコタンタンで生まれました。そして幼少期は、シェルブールにほど近いグレヴィル・アギユにあるグリュシーの集落で、信心深く貧しい農家に育ちます。この地方は、切り立った岩が海を見下ろすように連なり、壮観な景観を誇っています。1870年代に生まれ故郷に戻って以降、ミレーは印象派の到来を告げる一連の作品を製作します。

グレヴィル・アギユの村の真ん中に構える12世紀に建てられた教会は、写実派の巨匠を、その素朴さかつその永劫の香りで製作に駆り立てます。沈む太陽の光に、鳥たちの飛翔が描かれ、この絵に魂と力強さを与えています。

今日、グリュシーでは、この教会から数キロメートルのところにあるジャン＝フランソワ・ミレーの生家を訪ね、画家の内面に迫ることができます。

この絵はパリのオルセー美術館に展示されています。

ジャン＝フランソワ・ミレーの描いた素朴で可愛い教会は彼の時代と同じ佇まいでグレヴィル・アギユの村に立っています。教会の内部は、建立された十二世紀当時の空気をそのまま受け継いでいるかのような厳かな祈りの空間となっています。教会の雰囲気といい村の佇まいといい、魅力あふれたこの土地はこれからも多くの旅行者を惹きつけてやまないことでしょう。

#幸せなひととき ル・アーヴル、 ノルマンディー地方

ル・アーヴルの港の朝霧の中の日の出をホテルの一室から描いたこの作品は、印象派という言葉の元となりました。モネは、暗示に富んだ筆致で、朝焼けに包まれる工業港の光り輝く様子を再現しています。船のシルエット、さざ波、日光の反射が、大気と水とに放射状に広がっていくのが見えます。モネは、この傑作で、そうした束の間の感覚をそのままキャンバスに捉えること、そして美術史の流れを変えることに成功します。

今日、ル・アーヴル港は大きく近代化されていますが、その浜辺に行けば、印象派の画家が体験したものと同じものを、光あふれる海の眺め、天候によって変わる表情とともに今なお目にすることができます。そうした環境のもと、海沿いに建つ略称MuMa、ル・アーヴルのアンドレ・マルロー近代美術館は、フランスで最も充実した印象派作品を保有する美術館の一つであり、その常設展示を行っています。

この絵はパリのマルモクタン・モネ美術館に展示されています。

ル・アーヴルは美しい港町です。モネは「印象・日の出」で波間にたゆたう小舟を描きましたが、私が目にしたのはイギリス海峡対岸の町、ポーツマスへ向かう大きな客船でした。船の大きさは違えども、この町が旅立ちの雰囲気醸しているのは昔も今も違いありません。私が今回訪れた中で大好きになった町のひとつです。

クロード・モネ、「印象、日の出」1872年、
マルモクタン・モネ美術館、パリ
© SLB Christian Baraja

© Paris Region Tourist Board/Yasuhiro Ogawa



ノルマンディー、パリ・イルドフランス 印象派をテーマにしたデスティネーション契約: フランスにとっての世界的な観光ブランド

「ノルマンディー、パリ・イルドフランス 印象派をテーマにしたデスティネーション契約」とは、印象派発祥のこの地を文化的な観光デスティネーションかつ代表的な観光ブランドと認識し、フランスという観光地の魅力のさらなる増進につとめることを目的とします。

この目的に向かって当契約は、地方自治体、フランス国家、フランス観光開発機構、ノルマンディーとイルドフランスの2つの地方、文化および観光に携わる官民の主要機関45団体を集結しています。

2014年12月16日に締結された当契約は、この世界的な観光ブランドに関わる多くの関係者を組織化し、強化し、発展させ連携させることを目指しています。

そして、その目的の実現のため、当デスティネーション契約は、観光商品、国際ブランド、共通のプロモーションツールを展開するための戦略を段階的にとりいれています。

「印象派を巡る旅、幸せなひとときを探しに」と名づけられたこのブランドは、世界中の観光客に貴重な体験を約束します。

その狙いは、パリ地方とノルマンディー地方とを、印象派の画家の足跡を訪ねつつ、同時に優れた美術館でその作品を見学できる唯一の地方として位置付けることです。こうしてこのブランドは、観光客に特別で強烈な経験を約束するものとなります。数多くの幸福なイメージをかきたてる印象派という絵画の潮流に導かれる旅は、旅する者に特別なひとときの醍醐味を教えてくれるでしょう。

この独自の位置づけは、同時にまた、一連のプロモーションビジュアルで表現され、その中ではクロード・モネの2枚の絵画が、今日の旅行者の世界の中で生き続けています。



印象派を巡る旅

幸せなひとときを探しに

ひなげしの 野原を 駆けめぐる

印象派を巡る旅
いくつもの「幸せなひととき」を通り
アルマンディーとパリ・イルドフランス
あなた自身で体験してください

印象派を巡る旅
幸せなひとときを探しに

voyagesimpressionnistes.com

NORMANDY

REGION
NORMANDIE

VISIT
PARIS
REGION

ile de France

France

この特別な観光プログラムは、印象派をテーマにした旅を紹介するウェブサイト voyagesimpressionnistes.com で閲覧することができ、このサイトでは、約60ページにわたる冊子で、美術館、アーティストの家やアトリエ、また同時に史跡、自然スポット、散策、見学、レストラン及び新体験プログラムを幅広く集め紹介しています。それだけ多くの「幸せなひととき」をパリ地方及びノルマンディー地方で味わうことができるということです。



ノルマンディー地方観光局



ノルマンディー地方は、その美しい光によっていつの時代も、はっと息を飲むような景色や、その色合いや魅力で画家や写真家にインスピレーションを与え続け、ささやかな幸福感と大きな感動に出会える場所です。

アクセスが容易なノルマンディーは、パリからほんの1時間のところに位置します。パリやイルドフランス、ブルターニュ、ロワール峡谷など隣接する地方との組み合わせによって、長期滞在も短期滞在も可能です。

ノルマンディー地方観光局は、当地方の観光プロモーションをフランス国内外で行っています。

印象派発祥の地ノルマンディー。それは同時に……

特別な観光地なのです。

ノルマンディーは、その観光地(モン・サン・ミッシェル、エトルタ、ドーヴィル、オンフルール、ジヴェルニー、バイユー、カーン、ルーアン、ル・アーヴルなど)で世界的に有名です。

1000年にわたる歴史

ノルマンディーの歴史は1100年以上を超え、比類ない建築文化遺産が存在し、中世のジャンヌ・ダルクやウイリアム征服王という歴史上の人物が名を残すとともに、第2次世界大戦のノルマンディー上陸作戦のような重要な史実の舞台となっています。

美食の土地

ノルマンディーはその代表的な産品(バター、フレッシュクリーム、カマンベール、シードル、カルバドス、帆立貝など)で知られ、フランスの美食の「マストアイテム」に数えられています

ノルマンディー地方は、2017年、15,350泊を超える日本人観光客の宿泊を記録しています。

プレスお問合せ:

Marie-Gabrielle Clément, ノルマンディー地方観光局副局長
mg.clement@normandie-tourisme.fr
normandie-tourisme.fr
pro-normandie-tourisme.com

Normandie Tourisme



パリ・イルドフランス地方観光局



パリ地方観光局(CRT)は当地方の観光促進に関わる第一の公的機関であり、観光従事者及び観光客に対して働きかけ、パリ及びイルドフランスのプロモーション及び発展に努めます。地方観光局はその資源、ツール及びネットワークを、イルドフランス地方の観光業者に提供することで、彼らが高品質で革新的かつニーズに適した観光商品を展開できるよう支援しています。

パリ・イルドフランスは、今日、世界第1位の人気観光地となっています。競争の激しく、観光客の要求が高まりかつ常に変化している昨今、地方観光局の使命は、人気観光地としての地位を維持し強化する戦略を策定することです。

また、厳選され優れた観光商品を展開し、観光地の魅力を高め、観光客に繰り返し来訪してもらうようにし、業界の経済力を維持するとともに継続的な活力を与えることを目的にしています。

パリ・イルドフランスにおける日本人観光客の統計

- 平均滞在期間: 5.1 日間
- 満足度90.5%
- 1~2年以内に再訪したい人32.9%
- 人気アクティビティのトップ5: 史跡や美術館、博物館見学 (88.2%)、街の散歩(83.2%)、ショッピング (69.1%)、フランスの食 (58.8%)、ガイドツアー (18.9%)、
- パリ・イルドフランスでの2017年の観光客数349,000 (国外からの旅行者滞在の1.7% に相当)
- パリ・イルドフランスでの2017年の宿泊数180万 (国外からの旅行者宿泊の1.9% に相当)

詳細はパリ・イルドフランス地方観光局の業界向け専門サイトをご参照下さい。: pro.visitparisregion.com

出典: パリ・イルドフランス観光局、空港、列車、高速道路サービスエリア及びバスターミナルにおける常時アンケート - 2017年実績

VisitParisRegion



お問合せ先:

Catherine Barnouin, 広報責任者
cbarnouin@visitparisregion.com
visitparisregion.com
pro.visitparisregion.com



パリ地方観光局ならびにノルマンディー地方観光局は、域内の次の美術館および画廊に対し、作品画像の貸与にご協力くださったことにお礼申し上げます。オルセー美術館、マルモタン・モネ美術館、ルーアン美術館、ル・アーヴルのアンドレ・マルロー近代美術館 (MuMa)、ブラム・エ・ロランソー画廊。

写真家の撮影のため便宜を図ってくださった次の各位にも同様に感謝申し上げます。SNCF Mobilités、サン・ジェルマン・ブックル・ド・セヌ観光局、レストラン・フルネーズ、モレ・シュル・ロワン観光局、イエール市、オーヴェール・シュル・ワーズ/ソーセロン印象派観光局、トゥルーヴィル・シュル・メール市、クロード・モネ財団(於ジヴェルニー)、ルーアン・ノルマンディー観光局、ジャン・フランソワ・ミレーの生家、アーク・キャップ・コタンタン観光局、エトルタ観光局、ル・アーヴル広域圏観光局



BRAME & LORENCEAU



印象派を巡る旅
幸せなひとときを探しに